寅彦の見た風景 11【三角芝の足舐り】

野村　学

「河沿のある芝地を空風の吹く夜中に通っていると、何者かが来て不意にべろりと足を嘗める、すると急に発熱して三日のうちに死ぬかもしれない」（「化物の進化」（※1）より）

はじめに

昭和４年１月、雑誌『改造』に「化物の進化」が発表された。科学者でありながら“化物”の価値を積極的に認めた寺田寅彦により書かれた随筆である。寅彦自身の実体験を交えながら幼少期の “化物教育”の必要性を説いたこの作品を読むたびに、わたしは寺田物理学のルーツに触れる思いがする。「科学の目的は実に化物を捜し出す事なのである」、「化物がないと思うのはかえって本当の迷信である」、「怪異に戦慄する心持がなくなれば、もう科学は死んでしまうのである」など、数々の名言もこの作品に含まれている。

ところで、この随筆には寅彦先生の中学生時代に跋扈したという２種類の妖怪が登場する。すなわち「三角芝の足舐り」（以下、「足舐り」）と「Ｔ橋の袂の腕真砂」（以下、「腕真砂」）である。このうち「腕真砂」については橋詰延寿氏により出現場所の推定がされている（※2)。一方、「足舐り」の棲息場所は長らく不明のままであった。ところが最近、寅彦の姉・別役駒の回想にこの謎を解く手がかりが含まれていることに気づき、調査を行った結果、ついに棲息場所を推定することができた。今回はこの場所について報告したい。併せてここに妖怪が棲息した理由についても考えてみる。

三角芝の足舐り

「化物の進化」（冒頭引用箇所）によると「足舐り」は川沿いの芝地に空風の吹く頃現れる。不意にべろりと足を嘗められ、嘗められた者は命の危険もあるという。なんと恐ろしい化物だろう。他に情報は無いだろうかといくつか文献に当たったが、「足舐り」は極めてローカルな化物だったらしく、妖怪事典の類いにも取り上げられていない。「腕真砂」も同様である。同級生Ｎ君により創作されたこれらの化物は昭和の「口裂け女」のように全国区となることはなく、明治 20 年代の高知街に限定的に出現したようだ。類似の化物を探すとすれば、徳島県の妖怪「足なで女」があげられる。少し長くなるが『日本怪異妖怪事典』（※3）から引用してみよう。

「徳島県吉野川市鴨島町知恵島の三軒屋と鴨島町喜来の乗島との間には、江川の流れが作った淵があり、ユウネンの湖と呼ばれている。北岸の三軒屋側には淵の岸に沿った細い在所道があり、道のすぐ側に水がひたひたと寄せている。この辺りには得体の知れない化け物がいて、夜になると赤い着物の女に化けて、岸辺に近い淵の中に潜む。そして男の人がここを通りかかると、水の中からヌーッと現れて、水に濡れた冷たく細長い手で男の向こう脛を撫でるのだという。撫でられた者は毛が逆立つほど恐怖し、腰が抜けてへたり込ん

だり、気を失ったり、命からがら逃げ帰ったりする。」

「足舐り」は舌で嘗め、「足なで女」は濡れた手で撫でるという違いはあるが、嘗められた者あるいは撫でられた者の足の感触とその時の恐怖は類似のものだったことだろう。「足舐り」は川沿いの芝地、「足なで女」は淵の岸辺に沿った道に出現するとされており生息環境は似通っている。また「足舐り」は「空風の吹く夜中」、「足なで女」は「夜になると」とあり、どちらも出現時間は夜である。「足なで女」は明治の初め頃まで出現したということであるが、隣県で人々を震え上がらせたこの妖怪をモデルとしてＮ君が新たに「足舐り」を生み出したと想像することもできる。ただし「足舐り」の記録は寅彦先生の随筆にしかなく詳細はわからない。

三角芝を探して

「三角芝の足舐り」というくらいであるから、この化物は「三角芝」に出現するのだろう。「河沿のある芝地」とあるのが「三角芝」のことにちがいない。問題はその場所である。先ほど述べたように「足舐り」の記録は寅彦先生の随筆にのみ存在する。インターネットで検索したところで都合良く手がかりが見つかるはずもなく、古地図を眺めても三角芝と記されたところは見当たらない。皆目見当がつかず諦めていたところが、ある日突然、この場所を推定する手がかりに気づいた。その手かがりこそが、姉・別役駒の回想である。下に引用してみよう。

「家の前には廣場がありまして、そこを三角芝と呼んで居りましたが、ここでも子供達は盛に遊びました。その廣場の側の濠から、夕方には化物が出るなど言って居りました。」（※下線筆者）

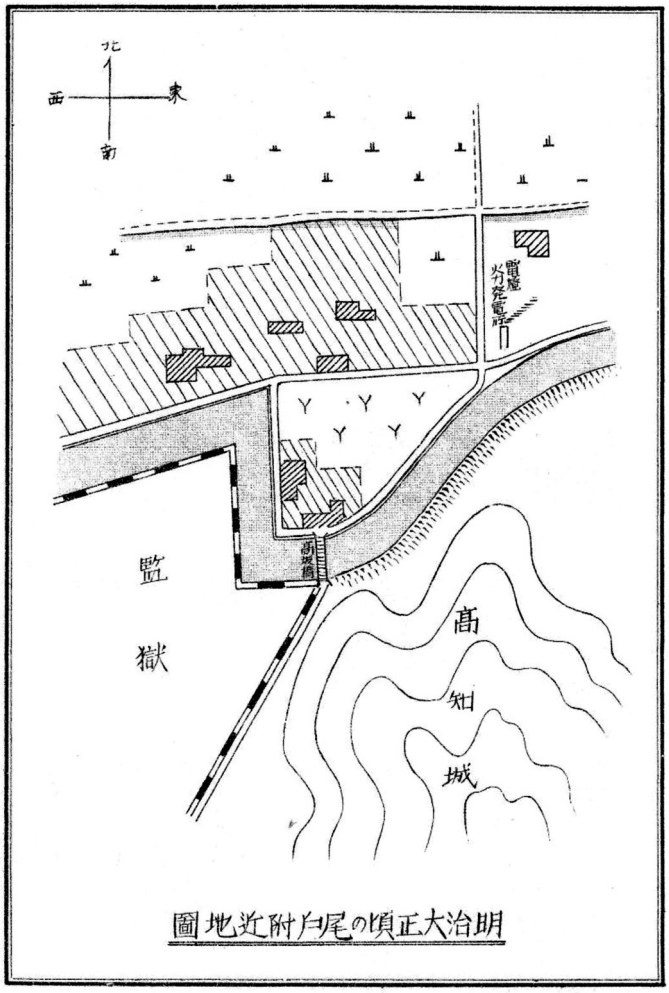
これは『回想の寺田寅彦』に収録されている「寅彦の幼時その他」（※4）の文章である。「寅彦の幼時その他」は寅彦の姉・別役駒が寅彦の幼児から青少年時代を語ったものを聞き書きしたものである。この回想になんと「三角芝」が登場するのだ。実はこの文章、わたしは以前に何度も読んでいたのだった。読んでいながら、うかつにも「三角芝」という言葉を認識できていなかった。ところが最近、あらためてこの文章を呼んでいたとき、天啓のように「三角芝」という単語が目に飛び込んできたのだった。家の前の広場こそが「三角芝」だったのだ。さらに「夕方には化物が出る」という文章が続くが、この化物こそが「足舐り」に違いない。

では家の前にある広場とはどこを指すのだろうか。寅彦邸の前は道路を挟んですぐのところに江ノ口川が流れており広場と呼べるような場所はない。さらに川向こうは当時は監獄である。どういうことだろうか。そのときふと頭をよぎったのが江ノ口川の流路のことである。寅彦邸付近の江ノ口川は大正末から昭和初期に現在の直線の流れに改修されたが、それ以前は今の小津橋付近で大きく南へ折れ曲がっていた。『土佐の陶磁』（※5）には当時

の様子が次のように描かれている。

「大正の頃には、河流も昔のままに大きく南に曲がり、楠の大木の繁ったスベり山の下路に沿って、再び北上し、現在の高坂橋辺は、激流が淵となって大きな瀬音を立てていた。」

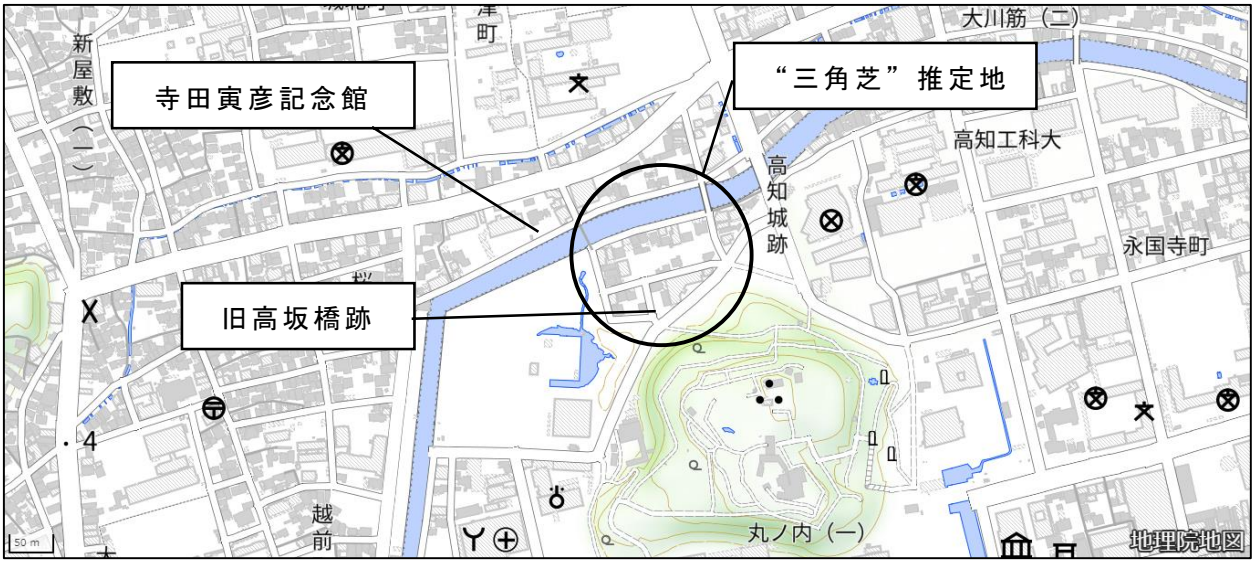
この旧河道に囲まれた場所こそが三角芝なのではないか。そう考えたわたしは、明治の頃のこの付近の地図を見てみた（※6）。すると、まさにその場所はレの字を描くように屈曲した江ノ口川に囲まれて三角の地形を形成している（図１参照）。ここに違いない！わたしは確信した。整理すると、この場所は「家の前」であり（正確には斜め前であるが）、側に「濠」があり（江ノ口川は高知城の外濠を兼ねていた）、「三角芝」と呼んで差し支えない形状をしている。また当時この場所には南西の一角を除き建物はなかった。つまり「廣場」であった。以上のことから、わたしはこの場所を「三角芝」と推定し（図 2）、「足舐り」の棲息場所はここであると推測した。長年の疑問が解けた瞬間であった。なお「Ｔ橋の袂の腕真砂」の「Ｔ橋」は橋詰延寿氏により「高坂橋のことか」と推測されている（※2）。当時の高坂橋はレの字に曲がった旧流路の南の頂点に架かっていた。北に渡れば三角芝である。「足舐り」と「腕真砂」は思いのほか近くに棲息していたようだ。次にこれらの化物がこの場所に出現した理由について考えてみたい。



（図１　『陶器全集　尾戸焼』より）

三角芝の怪異性

「足舐り」や「腕真砂」はなぜこの場所に出現したのだろうか。寅彦先生自身がタネを明かしているように、これら妖怪は同級生のＮ氏が創作したものである。そういう意味では昔から語り継がれてきた妖怪とは違うのかもしれない。それでも衆にひいでた化物の創作家が化物を配置するにあたっては、適当にその場所を決めたわけではなく、何か理由があったに違いない。その理由を探ってみよう。民俗学の助けを借りると、怪異の生じる場所について例えば『妖怪の民俗学』（※7）には次のようにある。



（図２　“三角芝”の推定地　※地理院地図に加筆）

「特定の場所が妖怪変化の出現と深いつながりをもっていることが従来も注目されてきた」「妖怪変化、それに伴う超常現象、神秘的現象が生じやすい場所が、民俗的空間のなかには存在していることが証明されている」

三角芝やＴ橋にもこのような「神秘的現象が生じやすい場所」としての特徴があるのだろうか。引き続き『妖怪の民俗学』を参考にすると、次のように書かれている。

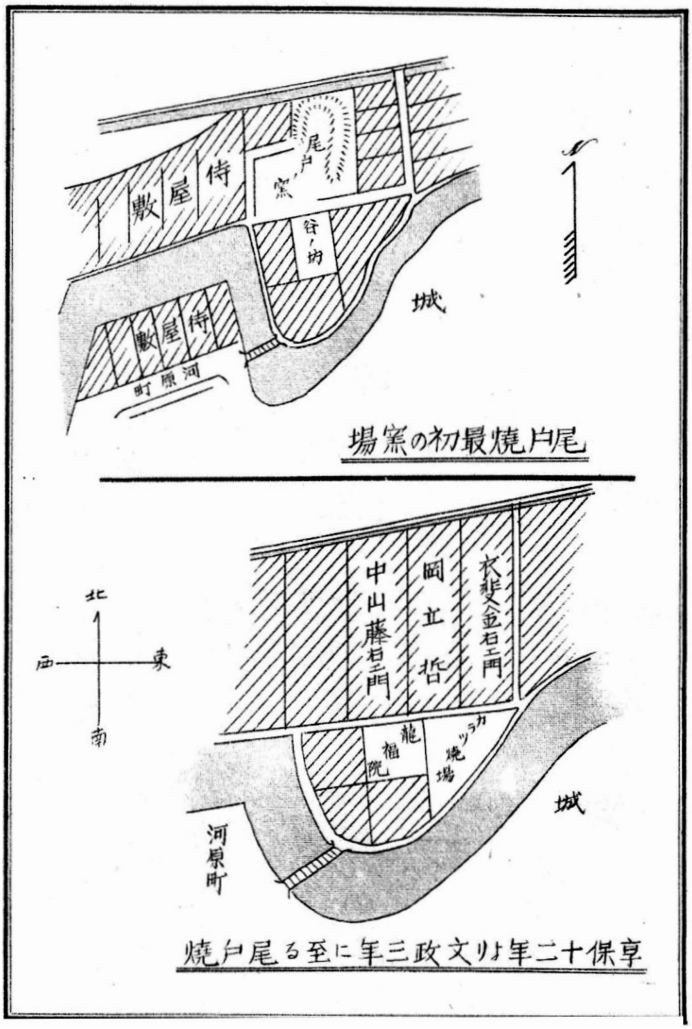
「霊力と関わる場所として想定されているのが、民俗学上、「辻」と「橋」とである。「辻」も「橋」も、独特な民俗空間と考えられているのである。」
「橋は、端っこの「端」であり、場所から言えば、地域の一番はずれになっているが、ここはまた同時に辻にもなっている。」
「川は、つねに境川になる性格があり、そこに橋が架かる。川と橋は交錯するわけであり、それは二つの空間が交錯したことを意味する。川を渡るのには橋しかないわけだから、ここを人々が密集して通過する。だから辻を形成しているわけで、橋の場所性についていろいろな言い伝えが残っている。」

この民俗学の知見を基に「三角芝」や「Ｔ橋」を眺めてみると、この付近はまさに「境川」（＝江ノ口川）による城下町と江ノ口村の「境」であり、境に架かる「橋」である。つまり民俗学的に見ると、この場所は怪異が生じるのに絶好の場所であるといえるのではないだろうか。もうひとつ付け加えるならば、「三角芝」の名称のことである。「三角屋敷」と言う言葉がある。辞書（※8）には「敷地が三角形をなす邸（やしき）。不吉なものとされた。」とある。なぜ敷地が三角形であると不吉なのかその辺りの事情は浅学にして知らないが、「東海道四谷怪談」にも登場する「三角屋敷」という言葉は確かに何事か凶事を予感させる雰囲気をただよわせている。「三角芝」という呼び方は実はこの「三角屋敷」から連

想されたものではなかっただろうか。つまり「三角芝」という呼び方そのものに当時の子どもたちは怪異の意味を込めていたのではないだろうか。

さらに歴史の視点からもこの場所を見てみたい。この辺りの歴史を考えるとき切り離せないのが尾戸焼である。三角芝には尾戸焼の窯が存在した時代があるが（図３参照）、その歴史について面白い記録がある。ふたたび『土佐の陶磁』から引用してみよう。

「ここに開窯した理由については、森田家の伝承に「高知城の鬼門に当たるため、その押さへとして築窯した。したがって焼成をする時には焔や煙の中に怪物が隠見した」としたものがある（森田寿丸筆記）。」



（図３　『陶器全集　尾戸焼』より）

鬼門の押さえとして築窯したのみならず、現に焔や煙に怪物が現れたとある。さらにこの場所には幕末まで「谷ノ坊」や「龍福院」などと呼ばれた寺社があったことも見逃せない（図３参照）。このあたりの事情も「鬼門の押さえ」と何か関係があるのだろうか。土地の歴史の観点から見ても「三角芝」はやはり怪異の出現と深いつながりをもっていたといえる。

以上、この場所の民俗学からみた特徴や歴史に現れた怪異を述べた。寅彦少年や同級生Ｎ君たちがこの場所の特殊性をどのように認識していたか分からないが、何やら怪しげな雰囲気のただよう場所であることは無意識のうちにも感じ取っていたのではないだろうか。つまり「足舐り」や「腕真砂」は理由もなくこの場所に出現したのではない。「それぞれの場所に対する感覚を研ぎ澄ませてつくられた妖怪」（※9）だったのだ。

おわりに

折しもこの原稿の執筆中に高知県立文学館では企画展「ムー45th　創刊 45 周年記念ムー展　謎と不思議に挑む夏」（会期：令和６年７月６日－９月 16 日）が開催された。わたしも行ってみた。会場では予想通りというべきか、寅彦先生の言葉が引用されていた。すなわち「宇宙は永遠に怪異に満ちている」（「化物の進化」より）。何やら因縁を感じた。

（写真　“三角芝”推定地の現在　現高坂橋から小津橋方面を望む）

さて「足舐り」はその後どうなったのだろう。『土佐の陶磁』には「大正十年頃河流を東西一直線に改修し、尾戸窯に関係する地は南北に分断され、谷の坊、竜福院とも呼ばれた地点や、後に南に移った第二次の窯のほとんどが堀割られて河中に没して現在に至っている。」とある。つまり「足舐り」の棲息地・三角芝は失われ、それとともに「足舐り」も絶滅したものと思われる。Ｔ橋を失った「腕真砂」も同様に滅びたのだろう。その時分のことが寅彦日記にも記されている。

「大川筋の改修は大分目に立って変わっていた。」（大正 15 年 7 月 30 日の日記）（※10）

江戸時代から続いてきた怪異の場所の最後の記録といえる。そして場所が失われると同時に化物たちも消えてしまった。

（参考・引用文献）

※1「化物の進化」（『寺田寅彦全集　第二巻』・岩波書店・1997 年）
※2『生誕百年記念増補改訂　寺田寅彦郷土随筆集』（高知市教育委員会・昭和 53 年）
※3『日本怪異妖怪事典　四国』（朝里樹監修/毛利恵太著・笠間書院・令和 5 年）
※4「寅彦の幼時その他」（『回想の寺田寅彦』・小林勇編・岩波書店・昭和 12 年）
※5『陶磁選書 2　土佐の陶磁』（丸山和雄・雄山閣・昭和 48 年）
※6『陶器全集　日本陶窯史　尾戸焼　上巻』（小野賢一郎編・民友社・昭和 7 年）
※7『妖怪の民俗学　日本の見えない空間』（宮田登・筑摩書房・2002 年）
※8『精選版　日本国語大辞典』（小学館・2006 年）
※9「「妖怪採集」のすすめ」（市川寛也・『怪異を歩く』・今井秀和/大道晴香編著・青弓社・2016 年　所収）
※10『寺田寅彦全集　第二十二巻　日記五』（岩波書店・1998 年）